

# 遠洋

水産研究所ニュース  
昭和 58 年 10 月

# No. 50

## ◇ 目 次 ◇

アイソザイム分析による大型鯨類の集団構造の解析……………	1
トピックス — この夏のスポーツ — ……………	4
クロニカ……………	5
刊行物ニュース……………	8
人事のうごき……………	10
遠洋 No. 1 ~ No. 49 の寄稿文一覧……………	10
それでも地球は動いている……………	14

## アイソザイム分析による 大型鯨類の集団構造の解析

### 系群研究の意義

1972年の国連人間環境会議で商業捕鯨の10年間モラトリアム提案が可決されて以来勢力を増した環境保護団体の猛烈な圧力によって、IWCの政策は年ごとに資源保護的色彩を強めてきた。南氷洋及び北太平洋における母船式捕鯨の対象鯨種であったナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラ、マッコウクジラは次々に捕獲が禁止され、現在はわずかに南氷洋のミンククジラ、日本沿岸のミンククジラ、ニタリクジラ、マッコウクジラ、ツチクジラ、マゴンドウに捕獲対象が限られている。更に1982年の第34回年次会議では、3年間の猶予の後商業捕鯨を全面的に禁止する決議案が採択され捕鯨業は一段と窮地に追い込まれた。決議案にはなるべく早い時期に包括的資源評価を完了し、資源状態の良好なものについては捕鯨を再開する旨が謳われているが、実質的には無期限禁漁に等しいものである。反捕鯨派は鯨資源に関する我々の知識には不確かなものが多いと主張し、それを捕鯨禁止の理由に挙げている。我が国としては今後一層資源研究を推進させて捕鯨存続の道を拓く必要に迫られている。

IWCの資源管理の原則では、系群毎の評価に基づいて漁獲割当量を算定することになる。従ってまず系群を明らかにする必要がある。鯨の資源量と置換生産量

(RY)の関係は銀行預金の元金と利子によく例えられる。しかし預金と生物資源との間には大きな違いがあり、前者は放っておいても利子が付くが、後者は利用しなければ利子は生まれない。つまり1つの系群における捕り過ぎによる減少を、ほとんど捕られない別の系群の増加で補うことはできない。系群別にRYを算定せねばならない理由はここにある。

このように重要視されているが、生物学的に明確に判別されている鯨類の系群は多くない。例えば南氷洋のミンククジラ資源は本格的に利用されて日が浅く、本研究を含めた努力が払われてはいるが未だに系群の分布を確定するのに十分な知見は得られていない。IWCは系群が判明するまでの暫定的措置として古くから南氷洋捕鯨の管理に使ってきた6海区制を適用し、各海区毎に捕獲頭数を定めている。これとても一応漁獲努力量の分散には役立ち、それなりの効果はあるが、系群別規制には遠く及ばない。

### 従来の手法

鯨類の系群研究には、プロポーシオン測定や体色、斑紋などの外部形態測定、肉体成熟体長をはじめとする生物学的パラメタの比較、標識法、血清学的手法などがある。プロポーシオン測定法の欠点は測定誤差が大きいことである。一般に系群レベルにおける外部形態の差異は個体毎にその属する系群を特定できる程大きなものではなく、多数の個体の平均値に差が出るのであるから、測定や観察はできる限り厳密に行う必要があるが、鯨体が

巨大なため例えば背びれなど曲線的なものの基底長を測るという場合に始点と基点をどこにおくか判断に迷うことがよくあるし、時には体軸に平行に巻尺を当てるといった基本的な操作すら捕鯨の現場ではできない場合もある。体色や斑紋の変異は普通連続的なものなので、いくつかの標準パターンを定めて類別するのだが、その判断はどうしても観察者の主観に左右されてしまう。生物学的特性値で良く用いられるのは肉体成熟体長、性成熟体長、妊娠率などであるが、このうち肉体成熟体長は有効な指標である場合が多い。系群間の差異が充分大きければ、以上の諸方法は簡便で手取り早い方法といえる。これに対して標識法には莫大な経費がかかる。例えば、現在 IWC が南氷洋のミンククジラに対して行っている標識計画では、用船経費を日本政府が提供しているが、その額は過去5年間で15億円に達する。この間に約3,000頭が標識され、60頭が再捕されているので、用船経費だけで再捕1頭当り2,500万円かかっている勘定になる。標識法のもう一つの欠点は標識と再捕が索餌海域でのみ行われる場合が多いことである。索餌海域と繁殖海域とを結ぶ情報が得られないと、系群の数やそれらの境界について断定的な事はなかなか言えない。血清学的方法は1950年代に鯨研の藤野氏（現北里大教授）が、ナガスクジラやマッコウクジラについて発展させたが、この手法では標準血清の作製などに高度の知識と技術を要するほか指標として用い得る形質の種類やその遺伝的支配について不明な点が多い。

### アイソザイム分析法

アイソザイムとは複数の遺伝子によって生産される、分子構造の異なる酵素の総称である。多くの場合、変異はアミノ酸1個の置き換わりによって起こるが、これにより酵素分子の表面荷電に違いが生じる（但しその率は生じた変異全体の1/4程度であるといわれている）。適当な支持体（本研究ではデンブengelを使用）の中で電圧をかけると、酵素分子はその荷電の状態に応じて陽極又は陰極方向へ荷電の強さに応じた距離だけ移動（電気泳動）し、同じ構造の分子が同じ場所にバンド状に集合する。泳動終了後特定の酵素だけを染色するような反応液にゲルを浸してバンドを可視化させ、その本数、相対的位置、濃度から遺伝子型を推定する。電気泳動の手順は必ずしも簡便とは言い難いが、ゲルを数枚に薄切りにすることにより同時に多くの形質について情報が得られる上に遺伝子型推定の信頼性が高いなどの長所がある。

### 当研究室における経過

私が当時の大隅室長（現底魚海獣資源部長）からこの研究をやってみないかといわれたのは1972年の夏であった。鯨類資源研究室には当時その方面の設備は全くなかったため、オットセイ資源研究室の奥本氏（現養殖研）に技術的指導をお願いし、その実験室を借用してスタートした。初めに指標形質として選んだのは血清エステラーゼと血清蛋白であったが、活性が弱かったり泳動パターンが複雑すぎて遺伝子型推定に難点があった。そこで長期間の凍結保存に良く耐え、泳動パターンがより単純な臓器中の諸酵素を対象を切り換えることにした。幸いにも、当時その方面で既に魚類や鳥類で先駆的な仕事をされていた東大海洋研の沼知助教授が指導を引き受けて下さることになり、1975年に大槌臨海研究センターに3ヶ月間留学して基礎研究を行う事ができた。アイソザイム分析の原理は既に確立されているものであるが、実際の仕事に応用する段になると不明な点や創意工夫の余地が多く残されていた。沼知助教授の分析のシステムはそれらの点を見事に解決して目を見張らせるものがあった。その後1976年から79年までの4年間に亘って共同利用研究の形で毎年2週間から1ヵ月程大槌臨海研究センターを利用させて頂き、系群研究の基礎をしっかりと固めることができた。又、アイソザイム分析を本格的に進めるにはオットセイ実験室が手狭になってきたので、これを機に独立することになった。幸い高価な機器は機械器具整備計画を利用することができたので、試薬類やその他の器具類は苦しいながらも毎年の経常研究費から捻出することができた。同室の方々や用度係の各氏には大変なご迷惑やお世話をかけたが、1980年頃には全国でも屈指の設備と自負できるものとなった。一方、作業の能率を高めるため、電気泳動と染色の手順の簡略化にも努め、現在では1日1人当り100個体を15遺伝子座について処理できる。アイソザイム分析法が系群のクイック・アナリシスたり得るかどうかは対象生物種の酵素について、電気泳動法と染色法に関する基礎的な実験データをいかに早く揃えるかにかかっている。そのためには研究者が実験などに充分時間を費やせる環境が必要であるし、標本の数が多い場合には別に人手も必要となる。水研のように研究者が多くのルーチン・ワークを抱えている中で、知識も設備もゼロからスタートするのではなかなかクイック・アナリシスにはならない。本研究も当初の目論見と違って、いつの間にか12年を経過しようとしている。



### これまでの成果

ヒゲクジラ亜目の10鯨種のうちホッキョククジラ、コクジラ、コセミクジラを除く7種とマッコウクジラ（ハクジラ亜目）は南半球と北半球の両方に同一種が分布している。しかし、両者は南北回遊のタイミングが半年ずれているため混合することなく独立した集団を形成していると考えられてきた。標識データや、南半球の個体の肉体重成熟体長が北半球の個体よりも1~2m大きいという事実などがこれを裏づけている。南北両半球の間でどれぐらいの遺伝的分化があるかを知れば、1つの半球内の分化の大きさもある程度推測できる。ナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラ及びマッコウクジラについて調べたところ、4鯨種とも多型の遺伝子座（1つの遺伝子座に複数の対立遺伝子があり、そのうち最も頻度の高いものが0.95かそれ以下の頻度で存在する場合）において、最も頻度の高い遺伝子の種類は南北共通であったが、その頻度には大きな差がみられた。南あるいは北に特有の遺伝子もいくつかみられたが、それらの頻度は極めて低かった。遺伝子頻度の南北差は統計的に著しく有意であり、両者が独立した集団である事がはっきり証明された。更に遺伝距離という尺度で測った南北間の分化の大きさを他の陸上動物（主に齧歯類）の系群間、亜種間、及び種間で調べた分化の大きさと比較してみると、ちょうど系群間の分化程度と一致しており、4鯨種の南北集団は亜種の段階までは分化していないといえそうである。

南氷洋のミンククジラについては少数標本による予備試験で異質性が認められた事に力を得て大規模な分析作業を行った。本格的な標本採集は1978年頃から実施されていたが、分析が追いつかないでいたところ、1981年にIWCから200万円の研究費が交付され、それと共に翌年までにデータを提出するようにとの督促まで頂いてしまった。これにより約12,000個体を15遺伝子座につき分析したが、残念ながら期待した系群分離は不成功に終わった。遺伝的変異はすこぶる豊富であったが、遺伝子頻度の分布には地理的勾配や局所的高低など異集団の存在を示唆するような特徴が全くみられなかった。南氷洋のVI区、I区、II区のものとは他区のものより体長がやや小さいのだが、調べた遺伝子座に関しては、何らこの差異を反映していなかった。

IWCは現在北太平洋のミンククジラを形態的、生態的分析に基づいて3つの系群に分類している。このうち韓国が利用している日本海—黄海—東シナ海系群と、日本が利用しているオホーツク海—太平洋系群との間で、

この分類をより確かなものにするためアインザイムの比較分析を行うよう勧告が出され、さっそく1982年に韓国水産振興院の朴科長の御尽力により日本海（対馬北方）の標本が送られてきた。そこで先の南氷洋集団と北太平洋の2つの集団相互の遺伝的分化を調べたところ次の事実が明らかになった。北太平洋の2集団は遺伝的変異にやや乏しく、多型の遺伝子座が南氷洋集団では4つあるのに対し日本海集団では2つ、オホーツク海—太平洋集団ではただ1つである。3集団に共通して多型的な遺伝子座において、最も頻度の高い遺伝子は南氷洋集団と日本海集団で共通であるが、オホーツク海—太平洋集団では他の2集団にはみられないユニークな遺伝子が最も高い頻度を占めている。つまりこのデータに関する限り、日本海のミンククジラの方がオホーツク海や太平洋のミンククジラよりも南氷洋のものに近い集団構造を持っていることになる。遺伝距離の値は南氷洋集団と日本海集団の間では系群レベルの範囲内であったが、南氷洋集団とオホーツク海—太平洋集団、日本海集団とオホーツク海—太平洋集団の間では亜種レベルに近い値を示した。日本海と太平洋及びオホーツク海は距離的にごく近いにも拘らず大きな遺伝的分化が達成されているのは日本列島と琉球列島が地理的障壁の役を果たしているためと思われる。今年の35回IWC年次会議で日本海—黄海—東シナ海系群のミンククジラは資源の再評価の結果保護資源に分類されてしまったが、本研究の成果によりオホーツク海—太平洋系群への波及は阻止された。

今後、ナガスクジラとイワシクジラは新たな標本が入手できないので、集団構造の研究の発展は望めない。ニタリクジラとマッコウクジラは引き続き日本沿岸の標本を収集しているので、かつての母船式時代の沖合のデータとの比較が残されている。日本沿岸のツチクジラとマゴンドウについては早急に系群を明らかにする必要があり、3年前から標本採集が行われている。ミンクに関してはもう少し多くの遺伝子座を調べたいと考えている。普通この種の研究では30程の遺伝子座を調べればほぼ申し分ないとされており、また凍結保存した試料を用いる限りそのあたりが限度と思われる。実はこれまで調べた遺伝子座はいわゆる“進化速度の遅い遺伝子座”と呼ばれているものに属している。“進化速度の速い遺伝子座”としてはエステルアゼ類やフォスファターゼ類があるが、活性が弱かったり、遺伝子支配の様式が難解な場合があって、これまで敬遠してきた。今後、これらの形質についても十分に検討したうえで、南氷洋の集団が単一であるか否か結論したいと考えている。

(和田志郎)



## トピックス

## この夏のスポーツ

## サッカー・登山・ソフトボール

### サッカー交歓試合

去る7月23、24日の両日、当水研に水産庁チームを迎えて第2回水産庁・遠水研親善サッカー大会が開催されました。昨年9月4・5日の第1回大会では水産庁チーム、当水研の隣りにある三保二小の父親サッカーチーム「育成会」、及び遠水研の3チームによる対抗戦が行われましたが、今回は前大会の盛況を受け実現の運びとなりました。今大会には、ここ数年間全日本女子サッカー大会で日本一の座を守り続けている清水第8クラブを特別招待し、水産庁、清水第8、育成会及び遠水研の4チームで行われました。試合は珍プレーの続出で終始和やかな雰囲気の中に終了しましたが、清水第8クラブの笑顔の可愛い無邪気な女の子達（平均年齢17才）が見せた華麗な足技は、皆の注目の的でした。我が遠水研チームは、日頃の猛練習の成果とハイテクニックを遺憾なく発揮し、苦しみながらも1勝1分けで水産庁チームを撃破して、今年もサッカー王国の地元清水の面目を保つことができました。

若い選手と昭和1ヶ月生まれの熟年選手との力がうま

く噛み合ったのも、勝因の1つにあげられるでしょう。試合終了後、盛大に開かれたレセプションでは、選手及



び関係者一同が時の過ぎるのを忘れて親交を深め、来年の再会を期して散会となりました。職員間の世代の断絶が叫ばれ、忙しさの中でお互いに疎遠になり勝ちな昨今、スポーツを通じ1つの目標に向かって皆が一体となり得たことが今大会の最大の収穫ではなかったかと思えます。最後に暑い中熱心な声援を送って頂いた応援の方々、大会の実行にあたって種々お世話下さった皆様に厚く御礼申し上げます。（宮部尚純）

### 富士登山

「完登に 面も輝く夏雪の 富士の背に立つ 十五の男女・山中一」去る7月30日早暁、標高3,776mの富士山頂での感激の歌。遠洋水研での毎夏の恒例行事となった富士登山に今年は15名が参加し、全員無事かつ安全に初志を貫徹することが出来ました。例年開山中でも7月は山の天気は不安定で、過去は幾度か日程の変更を余儀なくされたものでしたが、今回は上々の登山日和で、事の成否は各自の体調度とやる気次第と相成った訳であります。当水研所在地は海拔4～6m、そこから車で約2



時間、すでに雲上の標高2,380m富士の宮口、新五合目に至ります。7月29日午後10時の新五合目は車やバスから降り立つ人、次々と登って行くパーティーの列、交錯する懐中電灯の光、金剛杖の鈴の音等々、ここにしかない暗中のざわめきが気持をはやらせませす。高度順化のためのおよそ2時間の仮眠の後、午前0時を期していよいよ登りにかかりました。以下は参加会員諸氏の感想。「山頂へただ一筋に駆け登り 御来迎に我を忘れる・一井太郎」「ヤッタ。ニホンイチノヤマトウチョウニセイコウ。アアシンド・イシダユキマサ」「ナイーブな僕にとって富士登頂成功は途中の苦労をみんな忘れさせる程感動的だった。裕俊之」若い彼等は4時間半～5時間で登り切りました。「いやだいやだと思いつつ子供にひかれ2年続けて登りました。さて3度目は・畑中寛」「下駄ばきで登れるものとは思わねど苦しかりけり富士の山・大滝英夫」2度目の方々もはじめての方も仲良く頑張り精神を発揮。3年越しの挑戦者は「願望成就日本最高峰踏破。なせば成る…ヘタヘタ…・他力本願子」苦労の末の充実感、それは喜び。「ゆっくりと着実に一歩進めと教える富士の山、人生を語るがごとし・杉野千秋」各会員にそれぞれの思い出を刻んだ今夏の登山行。皆さ



んお疲れ様でした。秋も深まる今日この頃、富士はもはやうっすらと雪化粧。四季折々の美しい姿を遠望しつつ、ある部長の思い出の一首、「老骨に笞打ち登る白妙

の 富士の高嶺に汗を流しつ・海部繁人」今年参加出来なかった方のために来年も必ず計画されることを念願する次第であります。(竹内和男)

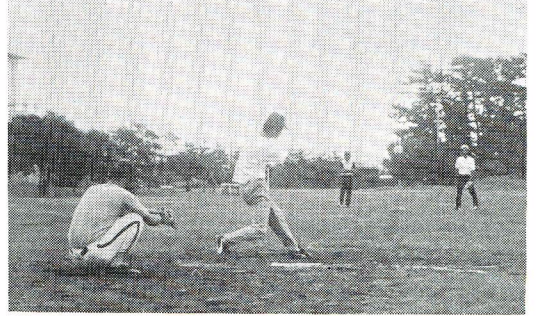
### ソフトボール交歓試合

夏季休暇も一段落した9月の10, 11日, 昨年の三重県遠征に引き続き, 今年も養殖研とのソフトボール交歓試合の計画が立てられた。清水海員学校の協力も得られ, グラウンドの確保の目途もつき, 折良く帰港中の俊鷹丸を加え, 3チーム総当りの2日間のプログラムも仕上がった。

今年の養殖研は, 年度内の南勢町庁舎移転を控えての忙しい最中であり, 参加者の人数が心配されたが, 最終的には多々良所長を初め, 総勢18名の大軍団が清水に押し寄せるといふ, 歓迎すべき結果となった。

折しも季節のはざまは風もなご, 絶好のスポーツ日和と気も奮い, 昼の対抗戦もさることながら, 夜の酒席舌戦の準備もおさおさ怠りなく, やれ酒は足りるか, オードブルのメニューは, 宿舎の配置はどうか, 朝食はこめ何合で間に合うのか? …… etc. 9月の雨は, 降るや降らずや気もそぞろの当日, 今にも泣き出しそうな晩夏の空が気がかりではあったが, とにかくにもプレイボールで野次が飛ぶ。〈ほらそこだ, 突っこめー!〉はたま

た〈今のは捕れるぞ, 飛びつかんかい!〉きわめつけ〈こら! サッカーじゃないぞ, 誰だボールを足で蹴る奴



は!〉 草野球, 口でやるほど楽でなく……。ちなみに試合の結果は, 俊鷹丸12—8 遠水研, 養殖研13—5 俊鷹丸, 遠水研11—11 養殖研, 遠水研俊鷹丸合同9—6 養殖研。この結果はさておいて, 雨にも降られず事故もなく, 仕上げは卓を囲んでの和気あいあいの舌戦, 痛飲歓談に時の経つのを忘れる。この夜の酒宴, 参加者実に70人。されば遠水研玄関ホールの賑わいも, いかばかりか御想像願えようというもの。さてもさて, 昼も夜も盛会裏の交歓会ではありました。(角 昌俊)

### ク ロ ニ カ

- 6. 9 さけ・ます及び海産哺乳動物調査(第1次航海) 北太平洋 石田技官(4. 25~): 水産庁用船若竹丸(北海道教育庁実習船管理局所属)を使用し, 定点において流網の繰返し操業を行い, 魚群の動態及び生物学的調査を実施した。日別 CPUE の増加・減少傾向から, 魚群の動向についての知見を得た。
- 6. 29 おっとせい異物絡まり調査 プリビロフ諸島セント・ポール島 吉田技官(~8. 9): 商業猟獲獣中の異物絡まり数の調査, 異物絡まり獣の発見後から死亡までの期間の調査, 異物の脱落率の調査, ハーレム・グラントに滞在する異物絡まり雌獣数の調査及び繁殖島の渚に打ち上げられた漁網等の種類と量についての調査を行った。
- 7. 5 大西洋クロマグロの漁獲資料の受け取りと聞き取り調査 東京 永井技官(~6): 昭和37~40年当時にブラジル沖で多獲されたクロマグロの漁

- 獲資料(日別平均体重)を入手すると共に, 漁獲状況を当時の関係者から聴取した。
- 7. 6 北西・アラスカ漁業センター, H. Shippen 氏 アリュージョン水域日・米共同底魚資源調査(第38大東丸)第1次調査事前打合わせのため来所。
- 7. 8 日・米共同底魚資源調査(第38大東丸による第1次調査) アリュージョン水域 手島技官(~9. 7): 1980年に引き続きアリュージョン水域の底魚類の資源を対象に着底トロール漁具による1時間びきの操業を水深帯別に設けられた123定点上で実施した。
- 7. 12 IWC 科学小委員会会議 英国ケンブリッジ 池田所長, 大隅部長, 粕谷・宮下両技官(6. 23~): 5分科会での討議に基づいて, 本会議に対して勧告を行った。日本に直接関係する本年の重点項目は南水洋のコイワシクジラ, 沿岸のツチクジラならびにいるか類(混獲を含む)であった。  
フィリピン大学漁業生物学教授 V. L. Aprieto 博士来所(~8. 11): 国際協力事業団研修生として当研究所浮魚資源部に1ヶ月間滞在,

まぐろ、かじき類稚仔の同定研究を行った。

水産庁資源課斎藤海洋開発班長 研究打合わせのため来所。

7. 13 IWC 年次会議 英国ブライトン 池田所長、大隅部長(～23)：ケンブリッジにおける科学小委員会に引き続き、13日から16日まで技術小委員会、財政小委員会関係の4種の会議が行われた後、19日から40ヶ国の政府委員によって総会が開催された。

さけ・ますの標識放流調査 北太平洋 岡崎技官(6, 7～)：水産庁調査船北光丸により北太平洋の43°N～46°N, 176°E～177°Wの水域で、延縄を用いて釣獲したカラフトマス、シロザケを主体に標識放流を行い、系群解析のための生物学的標本収集を実施した。

海洋観測資料に関する打合わせ 東京 行縄技官：JODC資料による公庁船資料の精度チェックに関する意見交換、協議を行った。

7. 14 研究事務打合わせ 東京 森田部長：水産庁研究課、資源課、国際課において、ICCAT 関連事項の打合わせを行い、資源保護協会、海外漁業協力財団、日鯉連にて研究実施上の打合わせを行った。

7. 18 共済事務担当者打合わせ会議 沼津 角, 若林両事務官：共済短期給付ほか認定、保健事業、貸付業務等についての事務検討打合わせを行った。

7. 21 小笠基地捕鯨生物調査 小笠原母島 和田技官(6, 30～)：期間中に捕獲された24頭のニタリクジラについて、通常の調査項目の他に、外部形態の観察及びプロポーションの測定を実施した。

7. 22 ポルトガル マデラ自治政府漁業局長 J. P. D. Borges 博士, 日鯉連国際部伊藤氏ほか1名, 日本における漁業研修の一環として来所。

昭和58年度開洋丸第2次調査航海(第3次南極海調査：SIBEX) 打合わせ 東京 小牧技官(～23)：「調査要綱(案)」を中心として調査実施上の諸点と、内外機関に対する連絡等につき協議した。23日は乗船調査員と開洋丸幹部とで、調査実施の手法等の細部打合わせを行った。

国立科学博物館武田氏 アルゼンチン沖甲殻類標本検索のため来所(～23)。

7. 23 鹿児島大学岩切教授ほかメキシコ研修生4名 まぐろ資源についての研修のため来所。

7. 25 まぐろ科学計算 筑波 本間, 鈴木両技官。ICCAT クロマグロ研究集会の開催と運営に関する打合わせ 筑波及び東京 久米技官(～26)。

7. 25 和歌山漁民研修会講演 勝浦 塩浜技官(～27)：メバチの生態と漁場形成及びミナミマグロをめぐる最近の情勢について講演した。

7. 27 オーストラリア科学技術研究機構(CSIRO) Harry Higgins 博士 研究打合わせのため来所。

7. 28 収入官吏事務打合わせ 東京 竹内(和)事務官：水産庁資源課において若竹丸さけ・ます調査による生産物売払いに係わる事務打合わせを行った。

8. 1 マリンランティング計画昭和58年度クロマグロ幼魚の標識放流実施打合わせ 下田 久田技官(～2)：下田市須崎を基地とする突棒船によるヨコワの標識放流計画に関して、現地漁業関係者に協力を依頼し、あわせて調査実施要領について打合わせを行った。

8. 2 資源・海洋関係部長会議 東京 小達, 森田, 大隅, 大滝各部長(～5)：沿岸域漁業管理適正化方式開発調査, 水産資源調査等に関する対策検討会の経過, 200海里水域内漁業資源調査データベース化構想の経過, 資源・海洋部門に関する最近の諸問題等について説明があり, 大半を研究推進構想に関する検討に当て, 所長会議への答申案をまとめた。

8. 3 東海流網漁業協会にて講演 清水 塩浜技官：南太平洋ピンナガの分布と大目流し網による開発の可能性について講演した。

8. 4 ギンダラ, マダラ資源調査(第21安洋丸)アリュージェン/ベーリング海水域 佐々木技官(5, 27～)：1982年に引き続き, アリュージェン/ベーリング海に設けられた57定点ではえなわ漁具による資源調査とギンダラの標識放流(7,002尾)を日・米共同で実施した。

東海近畿共同利用電算機運営委員会 安濃 本間技官(～5)。

8. 8 調査研究打合わせ 東京 岡田技官(～9)：第30回INPFC底魚関係提出予定文書及び日・米共同底魚資源調査の実施計画について打合せを行った。

第12宝洋丸用度事務及び若竹丸収入官吏事務 気仙沼及び函館 竹内(和)事務官(～14)：第12宝洋丸いるか調査事務打合わせ及び若竹丸さけ・ます調査による生産物の売払いに伴う収入官吏事務等を行った。

8. 10 イシイルカ調査 北太平洋 小城講師(北大水)ほか(～9, 11)：水産庁用船第12宝洋丸(宝洋水産所属)によって, さけ・ます漁期後における



イシイルカの分布調査を行い、電気鮪による捕獲標本について生物学的計測を実施した。

給与報告説明会出席 名古屋 細川課長。

8. 13 さけ・ます及び海産哺乳動物調査 (第2次航海) ベーリング海 島山技官 (水工研) ほか(6, 25~): 水産庁用船若竹丸を使用し、定点における流網漁獲物の生物学的測定及び延縄による標識放流調査を実施した。また、流網に混獲されたイシイルカ及び船の周囲に來遊したイシイルカの行動生態を調査した。
8. 22 会計事務打合わせ 東京 木下課長: 鯨類の標本及びその収納施設の寄付申入れに対する可否並びに内容の検討, 打合わせを行った。
8. 23 ICCAT 対策会議 清水 池田所長, 林企連室長, 森田部長ほか浮魚部員: 水産庁島参事官, 石田, 中前, 津端各技官, 東大海洋研究所石井助教授, 日本エス・ユー・エス(株)土井顧問を迎えて今年度年次会議に向けての我が方の取り組み方針について特にクロマグロを中心に協議及び意見交換を行った。
8. 24 IATTC James Joseph 所長 研究打合わせのため來所。  
遠洋課橋本, 国際課長島岡技官, 第30回 INPFC 提出予定文書類検討のため來所: 前記島参事官, 石田技官を加えて, さけ・ます関係提出予定文書9編, 底魚関係提出予定文書約15編について検討した。
8. 27 クロマグロの研究打合わせ 東京 山中技官: 東大海洋研, 東大農学部水産学科にて研究の打合わせを行った。
8. 29 マリンランティング計画昭和58年度クロマグロ幼魚の標識放流実施打合わせ 滑川及び氷見 久田技官 (~9. 1): 富山水試及び四共漁協(氷見市定置網組合) 関係者にヨコワの標識放流調査のための協力を要請し, あわせて調査の実施要領について打合わせを行った。
8. 30 ICCAT クロマグロ研究集会 筑波 森田部長 久米, 本間, 鈴木, 永井各技官 (~9. 3): 農技会筑波事務所において, 研究集会運営上の打合わせ及び参加者受け入れ準備を行った。ICCAT 事務局次長, 米国, カナダ, スペイン, フランス各国から研究者及び関係者が出席し, データベースに関する討議を行った。特に前回イタリアのトラパニの会議で合意された大西洋クロマグロの漁獲体長組成データの補完方法をレビューし, 若干の手直しを行い, また完成されるデータの利用の限界について討議を行った。
8. 31 冷凍標本魚の受け取り 東京 勝山技官, 井上事務官。
9. 1 開洋丸南極海調査航海用資材についての打合わせ 横須賀 小牧技官: 新規購入器材, 開洋丸や乗船研究者手持資材の確認, 野帳類, 調査要綱等印刷物, 調査補助員雇用諸手続につき打合わせを行った。
9. 4 ICCAT クロマグロ研究集会 清水 林企連室長, 森田部長ほか浮魚部員 (~8): 筑波における会議を遠洋水研に移し, 大西洋クロマグロに関して, 引き続きデータ及び解析方法の討論が行われた。また, VPA の適用に当たっての問題点について, 招へい研究者の Doubleday 博士(カナダ)による公開講義が行われた。  
日・米共同底魚調査生産物売払事務 釧路 竹内(和)事務官 (~7): 日・米共同アリュウシャン水域底魚資源調査による生産物の売払いに伴う収入官吏事務を行った。
9. 5 照洋丸観測機器の海上テスト及び調査打合わせ 伊豆半島沖及び東京 行繩技官 (~7): 新設, 改良した各種観測機器の作動テスト及び次航海に関する打合わせを行った。
9. 6 おっとせい網絡まり対策調査の打合わせ 沼津 (三津シーパラダイス) 吉田技官: 飼育中のおっとせいをを用いて行う, 網絡まりのメカニズムの解明のための調査方法等についての打合わせを行った。
9. 7 北西・アラスカ漁業センター T. Wilderbuier 氏 アリュウシャン水域日・米共同底魚資源調査終了, 資料とりまとめ検討のため來所。
9. 8 第6回極地生物シンポジウム 東京 大隅部長, 小牧技官 (~9): 国立極地研究所において約150名の参加者により開催され, 大隅は「南極海に分布するナガスクジラ属3種の肉体成熟体長の水域による差と資源量との関係」, 小牧は「開洋丸 SIBEX 調査航海の概要」と題する話題提供を行った。
9. 12 第2回 IWC 対策科学小委員会 東京 池田所長, 大隅部長, 粕谷, 和田, 宮下各技官: 来年の IWC 年次会議(第36回)の重点項目について検討した。又, ST モデル(マッコウクジラ)や田中モデル(ミンククジラ)の改良点について詳しい報告がなされた。

魚卵、稚仔魚の同定に関するシンポジウム  
東京 西川技官(～14)：クロタチカマス科魚類  
の幼期の形態について研究結果を発表した。

9. 13 IWC 対策会議 東京 池田所長。

日米加漁業委員会議事に関する国内検討会 東京 小達部長, 高木, 伊藤(準)両技官(～14) : INPFC 第30回定例年次会議のさす・ます分科会及び海産哺乳動物特別小委員会へ提出する文書, 予定議題に関連する事項について検討した。

9. 14 NAFO 第5回年次会議 レニングラード 川原技官(～23)：総務理事会, 漁業委員会及び科学理事会が開催され, 1984年の予算案, 許容漁獲量, 各国への漁獲割当量等が審議, 採決された。我が国関係では, 3+4区のマツイカ及び3M区のアカウオが前年同様の割当てを受けた。また, 科学理事会では食物関係に関するシンポジウムが開かれた。

北西・アラスカ漁業センター E. Brown 氏ア  
リョーション水域日・米共同底魚資源調査(第38  
大東丸)第2次調査事前打合わせのため来所。

水産庁遠洋課淀江技官 ニューゼalandい  
か釣り試験操業船の調査要綱打合わせのため来所。

9. 15 日・米共同底魚資源調査(第38大東丸による第  
2次調査)アリョーション水域 若林技官(～  
11. 11)：第1次調査に引き続いて, アリョー  
ション列島南北水域の定点で, 着底トロール漁具  
による資源調査を実施中。

9. 16 マリンランティング研究打合わせ 東京 森田部  
長(～17)：技術会議研究開発課及び水産庁研究  
課において, マリンランティング研究経過報告の  
とりまとめ及び予算に関する打合わせを行った。

9. 21 クロマグロ漁獲統計資料の整備 東京 久田技  
官(～22)。

9. 22 ICCAT 1983年年次会議打合わせ 東京 林企  
連室長, 久米技官：年次会議及び併催のSCRS対  
処方針を検討した。特に国際課及び日経連からの  
情報, 希望を聴き, 当方の方針を説明した。

9. 26 第8回北太平洋ビンナガ研究会議 清水 林企

連室長, 森田部長, 久米, 塩浜, 藁科, 宮部, 木  
川各技官, 大滝部長, 山中技官ほか海洋部員(～  
29)：米国南西漁業センター R. M. Laurs 博士,  
N. Bartoo 博士, 東北水研永沼, 田中両技官,  
静岡水試安井技師, 漁業情報センター山中博士,  
開発センター渡辺氏らを含めて17編の研究報告が  
紹介された。最新の資料及び意見交換が行われ,  
今後の研究に対する勧告を採択した。

昭和58・59年度海上調査のための用船打合わせ  
東京 吉田, 馬場両技官(～27)：海産哺乳動  
物基礎調査のための第58歡喜丸及びおとせい海  
上調査のための若潮丸の用船時期及び期間につ  
いての打合わせを行った。

9. 27 GSK 西日本底魚部会 高知 岡田, 勝山両技  
官(～30)：南西水研高知庁舎において, 西水  
研, 南西水研及び遠洋水研から約20名が参加し,  
8編の話題提供と討論が行われた。

BIOMASS いか生態作業部会 東京 畑中技  
官(～28)。英国および米国からの2名を含む9  
名の科学者が出席し, 南極海におけるいか類につ  
いての既往の知見の整理, 今後の調査研究の進め  
方などについての検討を行った。

チリ水産養殖プロジェクト検討会 東京 高木  
技官(～28)：日本産シロザケのチリ国への移植  
の経過と今後の計画について, 水産庁, 外務省,  
JICA の関係者で検討した。

まぐろ科学計算 筑波 鈴木技官。

9. 29 水研企連室長会議及び同懇談会 東京 林企  
連室長, 佐藤技官：研究部長から「資源管理型漁業  
と今後の研究推進」について話題が提供された。  
水産庁資料館の運営, 研究報告等の交換, 文献等  
のマイクロ化, コンテンツサービス, ASFIS の  
導入等情報問題に関する多くの論議が行われた。

9. 30 農技会企連室長会議 東京 林企連室長：農業  
場所では公立及び民間の研究機関, 大学を含めた  
研究体制の見直しが進められている。またバイオ  
テクノロジー研究が強化されている。

## 刊行物ニュース

OHSUMI, S. and Y. NAITO ……Whale sighting efficiency of the crew on board ocean research vessels  
in BIOMASS/FIBEX. *JARE Data Reports*, No.78 (Marine Biology 4), 1-49 : 1983年3月。



- 池田 郁夫……………エントロピー・モデルの漁業問題への適用 遠洋 No.48: 1-5, 1983年4月。  
池田 郁夫……………漁業における環境保全 環境情報科学 12(2)15, 1983年5月。  
大隅 清治……………海獣を食べる民族 週間朝日百科 No.124, 世界の食べもの・テーマ編④ 肉食の文化 58年5月。  
粕谷 俊雄……………鯨類の歯と年齢査定(Ⅲ) 科学と実験 34(6): 55-62, 1983年6月。  
大隅 清治……………本当に鯨を捕ってはいけないか 時事解説 No.9148, 1983年6月。  
久田 幸一……………ミナマグロの国際管理に関する日本, 豪州, NZ 三国の科学者会議 遠洋 No. 49: 1-4, 1983年

7月。

- 福田 嘉男(池田郁夫補注) ……水産業〔世界地理 第12巻 両極・海洋 所収〕朝倉書店 pp.297, 1983年9月。  
林 繁……………最近におけるマグロをめぐる国際会議 航跡 第327号: 2-4 :三崎船長航海士協会 三浦市 1983年9月。

TESHIMA, K. and S. OHSUMI…………Note on a newborn killer whale caught alive with trawl net. J. Mamm. Soc. Japan, 9(4), 208-210, July 1983.

FORRESTER, C. R., R. G. BAKKALA, K. OKADA and J. E. SMITHS………… Groundfish, Shrimp and Herring Fisheries in the Bering Sea and Northeast Pacific—Historical catch statistics, 1971-9176. Inter. N. Pac. Fish. Comm., Bull 41, 1-100, 1983.

---

IWC/ミンクジラ年齢査定作業部会提出文書 1983年4月。

OHSUMI, S.…………Yearly change in age and body length at sexual maturity of the fin whale stock in the eastern North Pacific. IWC/SC/A83/AW7.

OHSUMI, S. ……Examination of transition phase as a mark of sexual maturity of the Antarctic minke whale. IWC/SC/A83/AW 8.

---

IWC/セミクジラ・シンポジウム提出文書 1983年6月。

OHSUMI, S.…………Recent status of off-shore distribution pattern of the Southern right whale in summer. SC/35/RW19, 17pp.

---

IWC/35回科学小委員会提出文書 1983年6月。

KASAMATSU, F. and T. MIYASHITA………… The abundance of minke whales in the waters of 55°S~60°S of Area II. IWC/SC/35/Mi 20.

MIYASHITA, T. ……Population estimates for the southern hemisphere minke whales using mark-recapture data. IWC/SC/35/Mi 21.

WADA, S.……………A note on the gene frequency difference between minke whales from Korean and Japanese coastal waters. IWC/SC/35/Mi 22.

WADA, S.……………Movements of marked minke whales in the Antarctic. IWC/SC/35/Mi 23.

OHSUMI, S. and T. MIYASHITA…………Estimation of age distribution and recruitment rate of the Antarctic minke whale from size distribution of whales caught. IWC/SC/35/Mi 27.

MIYASHITA, T. and F. KASAMATSU…………Population estimate for the western North Pacific Bryde's whales using sighting and mark-recapture data. IWC/SC/35/Ba 8.

KASUYA, T. and L. JONES…………Behaviour and segregation of the Dall's porpoise in the northwestern North Pacific. IWC/SC/35/SM 10.

KASUYA, T. and S. OHSUMI…………Supplemental analyses of the Baird's beaked whale stock in the western North Pacific. IWC/SC/35/SM 25.

KASUYA, T., T. TOBAYAMA and S. MATSUI…………Review of live capture of small cetaceans in Japan, Indonesia and Taiwan. IWC/SC/35/SM 26.

KATO, M.……………Abundance of Dall's porpoise in the North Pacific Ocean. IWC/SC/35/SM 27.

- ODATE, S. and J. ITO,……Investigation and study on Dall's porpoise incidentally taken by salmon gillnet fishery in the North Pacific Ocean. IWC/SC/35/SM 28.  
 IKEDA, I. ……Preparation on comprehensive assessment of whale stock. IWC/SC/35/O 11.  
 Anon. ……Progress report on whale research, June 1982 to May 1983. IWC/SC/35/ProgRep. Japan.

マグロ漁業研究協議会議事録 昭和57年度 遠洋水研 1983年6月。

- 山中 一……調査研究の概要 A海洋部 (10~20)。  
 上柳昭治……調査研究の概要 B浮魚資源部 (20~39)。  
 本間 操……総括：はえなわ調査関係 (71~81)。  
 森田二郎・山中 一……西部赤道太平洋における北赤道反流の季節変化について (予報) (197~201)。  
 久田幸一……ミナミマグロの資源評価 (202~209)。

第8回北太平洋ビンナガ研究会議提出文書 1983年9月。

- SHIOHAMA, T. ……Review of the current Japanese North Pacific albacore fisheries, 1983. NPALB/14.  
 SHIOHAMA, T. ……A brief stock assessment of North Pacific albacore by generalized production model, 1961-1981. NPALB/15.  
 SHIOHAMA, T. ……Estimation of catch by age of the North Pacific albacore caught by Japanese longline fishery (Preliminary). NPALB/16.

人事のうごき

9.26 命 水産庁照洋丸機関長

(遠洋水産研究所俊鷹丸機関長)

技 菊 野 正 人

遠洋 No.1 ~ No.49 の 寄 稿 文 一 覧

発行年月	No.	表 題	著 者 名
昭和44年8月	1	南氷洋産ナガスクジラの資源診断闘争	大 隅 清 治
”	”	ミナミマグロの資源管理を提案した背景	須 田 明
昭和44年11月	2	遠洋水産資源問題について思う	木 部 崎 修
”	”	遠洋水域における未利用浮魚資源開発	須 田 明
”	”	バイオテレメトリーの歩む道	市 原 忠 義
”	”	国際漁業資源の管理について	William C. Herrington
昭和45年2月	3	“幻の魚” 素描—クサカリツボダイ—	千 国 史 郎
”	”	「深海海底開発モラトリアム」を含む国連決議	福 田 嘉 男
”	”	漁業をめぐる国際法の問題について	山 本 草 二
昭和45年5月	4	Slender-tuna ( <i>Allothunnus fallai</i> SERVENTY) の脳髄形態からみた行動について	内 橋 潔



昭和45年 8月	5	なんとも複雑な瞬間—キハダマグロの授精とふ化—	森 慶 一 郎
昭和45年12月	6	国際海洋法会議開催に関する関連決議	福 田 嘉 男
”	”	古道具の効用	長 崎 福 三
昭和46年 2月	7	ミナミマグロ資源管理についての第2回目の提案	新 宮 千 臣
昭和46年 5月	8	大西洋の二つの会議	長 崎 福 三
昭和46年 9月	9	亜細亜鰹鮪漁業者懇談会について	塩 浜 利 夫
昭和46年12月	10	見果てぬ夢—情報流通改善試案—	福 田 嘉 男
昭和47年 3月	11	環境問題と漁業管理	斉 藤 達 夫
昭和47年 8月	12	深海への招待	池 田 郁 夫
”	”	マグロ類の標識放流を実施	塩 浜 利 夫
昭和47年11月	13	農林省共同利用電算機システム導入の波紋	久 米 漸
昭和48年 4月	14	資源問題と日本の精神的風土	千 国 史 郎
”	”	キハダの標識放流	塩 浜 利 夫
昭和48年 8月	15	俊鷹丸誕生 竣工後の俊鷹丸の動静と、残された問題点 彼女への期待と不安	音 田 六 哉
”	”	自然保存と資源利用	角 田 精 一
”	”	出揃った漁業制度試案—海洋法会議・第6回準備会—	三 谷 文 夫
”	”	遠洋水研による標識放流の近況	大 隅 清 治
		1. 48年度、北太平洋ビンナガの放流	須 田 明
		2. 近年におけるサケ・マスの標識放流	(浮 魚 資 源 部)
			(北 洋 資 源 部)
昭和48年12月	16	資源環境研究に思う	奈 須 敬 二
”	”	鰭脚類に関するシンポジウム	市 原 忠 義
”	”	日米加年次会議 (INPFC) に出席して	佐 々 木 喬
”	”	遠洋水研による標識放流の近況II	
		3. 北洋底魚の標識放流	(底魚海獣資源部)
		4. 鯨類の標識調査	(底魚海獣資源部)
昭和49年 3月	17	海洋への関心—その多様性と統合—	久 宗 高
”	”	<水産海洋研究会座談会> (49. 1. 7) “水産資源研究における海洋研究の価値”	山 中 一 郎
”	”	東部ベーリング海つづ漁業の問題点	永 井 達 樹
”	”	遠洋水研による標識放流の近況III	奥 本 直 人
		5. オットセイの標識放流	
昭和49年 6月	18	1974年日ソ漁業委員会科学技術小委員会におけるサケ・マスの論議	佐 野 蘊
”	”	クジラ資源をめぐる三つの特別国際会議	大 隅 清 治
”	”	ペタンクをやろう	高 田 清 徳
”	”	不思議なこと	河 野 秀 雄
”	”	Poorな図書室	西 川 智 恵 子
昭和49年 9月	19	ICNAF雑感	長 崎 福 三
”	”	第26回 IWC 年次会議における科学小委員会の議論	大 隅 清 治
”	”	熱帯カツオ専門委員会とそれをとりまく情勢	木 川 昭 二
”	”	調査船運航の難問—新俊鷹丸、遠洋初航海同乗記—	山 口 閔 常
”	”	遠洋水研による標識放流の近況IV	
		6. アフリカ西岸におけるタイ類の標識魚再捕について	(遠 ト ロ 研 究 室)

昭和49年9月	19	夏の北歐またたびがらす	山 中 一
昭和49年12月	20	東南アジア漁業開発センター調査部局	水 戸 敏 郎
"	"	FAOとMARMAPによる魚卵・稚魚と国際研修	森 慶 一 郎
"	"	遠洋水研による標識放流の近況V	
"	"	7. 北米沿岸における標識ビンナガの再捕について	久 米 漸
昭和50年7月	21	大西洋マグロ類保存国際委員会 (IC CAT) の近況	久 米 漸
"	"	標本処理棟に寄せて	池 田 郁 夫
"	"	おぼえがき一漁業と資源についての社会科学“風”迷想一	森 田 祥
昭和51年6月	22	マグロ類に使用される標識の低温折損に関する覚え書	久 米 漸
"	"	米国200海里法案	池 田 郁 夫
昭和51年6月	23	北太平洋おっとせい委員会第19回定例年次会議に出席して	吉 田 主 基
"	"	GSKシンポジウム雑感	山 中 一 郎
"	"	談話会委員雑感	久 田 幸 一
昭和51年7月	24	北西太平洋日ソ漁業委員会第20回定例会議を終えて	佐 野 蘊
"	"	碧眼同乗記	木 谷 浩 三
"	"	照洋丸のIOP航海始末記	山 中 一 郎
昭和51年10月	25	SCAR/SCOR 南大洋生物資源に関する国際会議に出席して	大 山 龍 蔵
"	"	ローマ雑感	林 繁 一
昭和52年1月	26	国際合同海洋学会議 (Joint Oceanographic Assembly・JOA) に出席して	山 中 一 郎
"	"	ヌメア (ニューカレドニア) で開かれたカツオ研究者会議に出席して	上 柳 昭 治
"	"	GSK雑感	森 田 祥
昭和52年4月	27	日本のアザラシ産業の紹介	吉 田 主 基
"	"	大西洋からのシロカジキ <i>Makaira indica</i> の漁獲記録	藁 科 侑 生
昭和52年8月	28	南極地域の法的位置について (その歴史的考察と問題点)	大 山 龍 蔵
"	"	Canberra, 1977 —IWC顛末記—	福 田 嘉 男
昭和52年8月	特集号	我骨刺されて身を離る	福 田 嘉 男
"	"	遠洋水研と私	木 部 崎 修
"	"	遠洋研難産の記	矢 部 博
"	"	遠洋漁業の将来問題	宇 田 道 隆
"	"	鯨はどうなる	大 村 秀 雄
"	"	200海里時代の遠洋研に期待する	田 中 昌 一
"	"	遠洋水研と私—マグロ研究の思い出—	
"	"	「10年に想う」	Tamio Otsu
"	"	水研以前	磯 貝 肥 男
"	"	開洋丸の思い出	藤 村 弘 毅
"	"	思い出あれこれ	陣 野 哲 朗
"	"	北洋資源部その10年 —函館から清水へ—	田 辺 陽 太 郎
"	"	マグロ研究小史	佐 野 蘊
"	"	10年記 (忌)	上 柳 昭 治
"	"	海洋部の10年に思う	池 田 郁 夫
"	"	研究所の裏方	山 中 一 郎
"	"	総務部回顧	水 戸 敏 郎
"	"	北洋資源部移転こぼれ話	大 山 龍 蔵
			清 水 徳 之 助



昭和53年4月	29	FAOから帰って	林 繁 一
"	"	開洋丸便り	高 橋 利 治
昭和53年8月	30	サケ・マス流網に羅網する海鳥	佐 野 蘊
"	"	オーストラリア, ニューゼaland海域の魚卵, 稚魚	水 戸 敏
昭和53年10月	31	オキアミ問答	山 中 一 郎
"	"	北大平洋ビンナガの日米共同研究	塩 浜 利 夫
"	"	メカジキの腸	上 柳 昭 治
昭和54年1月	32	1978年ICCAT会議	鈴 木 治 郎
"	"	アリューシャン海盆のスケトウダラ資源調査について	岡 田 啓 介
昭和54年5月	33	照洋丸乗船記	山 口 峰 生
"	"	遠洋水研におけるおきあみ研究計画	奈 須 敬 二
昭和54年7月	34	交互追尾操業 (ATA) によるトロール網の vulnerability の推定	池 田 郁 夫
"	"	ズワイガニの標識法	竹 下 貢 二
昭和54年12月	35	アリューシャン水域とアラスカ湾におけるギンダラとマダラの資源調査	藤 田 蘆 喬
"	"	バラノフを読んで	佐 々 木
"	"	船舶の賠償責任と公用船	川 原 重 幸
昭和55年1月	36	海洋牧場候補種「サクラマス」	西 園 敏 則
"	"	大西洋クロマグロの研究会から	待 鳥 精 治
昭和55年4月	37	サケ降海幼魚の追跡	新 宮 千 臣
"	"	談話会委員雑感	伊 藤 準
			川 原 重 幸
			山 口 重 峰 生
			藤 田 蘆 喬
			宇 都 正 巳
昭和55年10月	38	南極処女調査航海私記	高 橋 利 治
"	"	イカ類資源の国際会議と国内会議に出席して	畑 中 寛
"	"	オーストラリア在外研究によせて	木 谷 浩 三
"	"	コーホルトアナリシス入門	永 井 達 樹
昭和56年1月	39	溯河性サケ科魚類と海洋収容力	高 木 健 治
昭和56年4月	40	近年の「自発的抑止論議」について	福 田 嘉 男
昭和56年8月	41	開洋丸第2次南極海航海記	小 牧 勇 蔵
昭和56年10月	"	ミクロネシア漁業開発プロジェクト参加の記	木 川 昭 二
昭和57年1月	43	第28回INPFC年次会議から	池 田 郁 夫
昭和57年4月	44	超音波標識法によるマグロ類の遊泳行動 一特に遊泳水深の研究一	米 盛 保
昭和57年7月	45	オットセイ仔獣の飼育研究	馬 場 徳 寿
昭和57年10月	46	オットセイ資源研究におけるバイオテレメトリーシステムの開発と実用について	吉 田 主 基
"	"	研究生活あれこれ	川 上 武 彦
昭和58年1月	47	クロマグロの海洋牧場(資源培養)研究	上 柳 昭 治
"	"	飼育下でのオットセイの出産	吉 田 主 基
"	"	D端末計算機の設置	本 間 操

昭和58年4月	48	エントロピー・モデルの漁業問題への適用	池 田 郁 夫
昭和58年7月	49	ミナミマグロの国際管理に関する日本、豪州、NZ 三国の科学者会議	久 田 幸 一
”	”	D 端末電子計算機の近況	本 間 操
”	”	ワードプロセッサ受難史抄	山 中 一

## それでも地球は動いている

(編 集 後 記)

このニュースの創刊は、昭和44年8月であった。それから数えて第50冊目の本号をお届けする。記念すべき番号ではあるが、編集の時期がいくつかの大きな会議に向けての準備と重なってしまったので、残念ながら特別の企画もできなかった。その代りというわけでもないが、この14年間に頂いた寄稿のリストを載せて、ニュースの歴史の一端を示すこととした。

本号がカバーしている7～9月にも、当研究所は多くの国際的な水産資源の評価と管理のための会議に参加した。特に6月23日から7月12日にかけて英国ケンブリッジで開かれた国際捕鯨委員会（IWC）科学小委員会、引き続いて会場をブライトンに移した7月23日迄の本委員会年次会議及び技術小委員会では、一般紙にも報じられた通り、きびしいやりとりの中で、我が国の研究者は大きな役割を果たした。ここで大きな役割りとは我が国の利益を確保したという意味だけではない。討議を通じてくじら類、ひいては水産資源一般の研究の発展に対する貢献を言いたいのである。

本号では集団遺伝学の方法を用いたくじらの系統群の識別に関する研究を和田主任研究官に紹介願った。これは資源評価の一環として最近の10年あまりの間当研究所で進められてきたものである。1975年に採用されたIWCの新しい管理方式が定着した現在では、くじらの資源を系群別に評価し、管理することはあたかも自明であったかのように常識化している。しかしすでに多くの研究者が指摘してきた通り、1972年の国連人間環境会議におけるくじら類捕獲のモラトリアム決議が提出された原因の一つが過去の資源管理の失敗にあり、特に種を無視して、シロナガスクジラ換算頭数によってくじらの全資源の捕獲枠を決めてきたために有用な種から著しく減少させてしまったという遺憾な歴史に対する反省の上に資源の研究が進められているのである。この10年間の研究の進歩と社会の動きを感じずにはおられない。

所で本欄でも繰り返す指摘したが、近年の国際会議では、幾通りかの資料や計算方法を試みて、都合の良い結果を使う研究者がかなり多い。IWCに出席している研究者の中にもその例がかなりあることは、すでに良く知られている。このような話は昔からなかったわけではないけれども、彼等がとっている態度はその比ではない。

一口に、ためにする論拠と見えるものの中にも、当の研究者が真実そう信じ込んでいる場合もある。いかなる大学者といえども、その思考が彼の生活の場である社会によって支配される以上、やむを得ないことである。これに対しては十分な根拠を提出することによって、科学の中で解決できる筈である。もっとも、資源研究が単なる身最良ではなくて、資料を得た漁業によって偏ることもあるので、研究者は常に他人の意見を取入れるだけの余裕が要求されている。問題となるのは、特定の偏見などに影響されている人々である。これもそのよって来る所は一様ではない。その中には、偏見とは時として相対的なものであるということを考えに入れても、日本人の目からは中世の十字軍を思い起こさせるものさえある。捕鯨の禁止はたしかに生物資源の利用とは別の次元に属する思想、信条、倫理上の課題でもある。水産の枠を越えた中広い問題であるからには、そういった観点から話し合わない限り、論議は空転して、研究者の苦労は続くことになる。外交官、作家、ジャーナリストを含む捕鯨問題検討会から来年7月迄に提出される報告書には深い関心を寄せざるを得ない。自然の利用と保護に係る対立は捕鯨など国際問題だけではない。国内でも水産業と他産業、産業とレクリエーションと自然保護といった関係がある。水産資源研究が社会に役立つためには、判断の基準そのものの再検討が必要な時代に入っているのである。

(林記)

昭和58年10月15日発行

編 集 企 画 連 絡 室

発 行 水産庁遠洋水産研究所

〒424 静岡県清水市折戸

5丁目7番1号

電 話 <0543> 34—0715